

日本声楽発声学会 学会通信 第51号

2024年(令和6年)3月

◆ 会員の皆さまへ

会長 佐々木 正利

ここ盛岡では鉢植えの沈丁花がほのかに香る今日この頃ですが、会員の皆さまにはますます御健勝にてご活躍のこととお慶び申し上げます。

本年は元旦から痛ましい能登半島地震に見舞われ、また羽田空港での航空機の衝突事故など暗い幕開けとなりました。また3年に及ぶコロナ禍からようやく解き放たれたと思いきや、再び流行の兆しが見え始め、ひそかに第10波、第11波に怯える生活を余儀なくされています。特に我々声楽発声に関わる人間にとっては、また目の敵とされる状況に戻るのではと戦々恐々としています。とは申せ、昨年6月に発足した新役員体制下での学会活動は、ひと時たりとも停滞することは許されませんから、鳥の目、虫の目、魚の目という視点をもって、謙虚な中にも強い意欲、意志を携え運営に勤しもうと、理事全員気を引き締めています。

早いものでもう新年度を迎えますが、学会の改革は着実にその歩を進めています。今、特に力を入れておりますのは、「学会理念、倫理綱領」の見直し、確認で、「学会理念、および倫理綱領作成検討委員会」（委員長：小森輝彦理事）で検討を続けており、5月の総会で何らかの提案がなされるものと期待しております。そして何と言っても学会活動の基幹をなす、例会、夏季研修会、学会誌『声楽発声研究』の更なる充実に向けて、会員の皆さまのご協力を仰ぎながら、理事会として力戦奮闘する所存です。

会長としてこの学会をどういった方向に舵取りしていきたいかを、箇条書き的にそれを順不同で並べると以下ようになります。

- * 研究の巧拙、稚拙を問わない
- * 研究の専門性、独創性に敬意を表する
- * 研究者の尊厳を犯す言動を慎む
- * 情報交換、共有を積極的に図る
- * 他学会、組織との横断的な協働研究を推進する
- * 地方に居住する会員との連携を密にする
- * 組織の緊密性、柔軟性を強化する
- * 適材適所、人的財産をフル活用する
- * 現役声楽家の入会を強く働きかける
- * 実践、理論、教育を満遍なく充実させる
- * 世界との交流を活性化する
- * 温故知新を実践する

さて、日本声楽発声学会は今年60周年という記念の年を迎えます。その間、声楽の歌唱法、並びに発声法実践のみならず、音声医学や脳科学、身体学とも連携して、声楽発声におけるあらゆる諸課題の科学的解明、実践力強化を目的とし共同研究に取り組んでまいりました。また教育界、合唱界とのつながりをも大きな命題とし、学校教育現場における発声指導法にも深く関与していきたいと思っておるところであります。これらの具現化のために、より多くの会員の皆さまが例会その他の本学会の企画にご参加くだ

さり、皆さまの学会として、いっそう発展いたしますことを心から祈念しております。また、我々役員も皆さまのために身を粉にして働き、学会を育むにふさわしい矜持と気概と責任感を持って今後の活動に臨めますよう、決意を新たにしています。いよいよ任期 2 年目突入間近です。皆さまとともに、そして皆さまのために、充実した「日本声楽発声学会丸」となるよう舵取りをしっかりと遂行していきたいと存じます。更なるご指導、ご鞭撻を心よりお願い申し上げます、会長挨拶といたします。本年もどうぞよろしくようお願い申し上げます。

◆ 2023 年度夏季研修会アンケート結果

昨年、理事会広報部では夏季研修会（8/23、24 日本福音ルーテル教会）について、Web アンケートを実施しました。QR コードを用いてのアンケートは初めての試みでしたが 24 件の回答があり、皆様から貴重なご意見をいただきました。ご協力に感謝申し上げます。

参加・部分参加の方からは各講座の感想を、不参加の方からは開催時期や会場についてのご意見をいただいています。

【開催日程について】「良い」「良くない」がほぼ同数となりました。

年間予定が早めにわかるとよい／平日昼間だと参加者が限られる／時期的に他の行事や学会と重なってしまう

【会場について】「良い」が約 8 割でした。

場所がわかりにくい／地方開催の場合はネット配信を希望

【各講座についてのご意見】

演奏だけでなく多面的に学べて良かった／講演の音が聞き取りづらかった／医学的な話が参考になった／学会の方向性に沿った講師を呼んでほしい／それぞれの時間がもう少し長いとよい

これらのご意見を受け、より充実した夏季研修となるよう今後の企画に活かしてまいります。

■ お悔やみ

泉 恵得先生（琉球大学名誉教授）

2024 年 2 月 13 日に泉恵得先生が 76 歳でご逝去されました。大学に赴任されてより長年にわたり教育学部と大学院に於いて声楽のご指導にあたられてきました。同時に日本声楽発声学会員、また理事として学会をお支えくださり、定年退職なされてからも音楽界と教育界の発展にご尽力されました。先生のご功績をここに称え、謹んでお悔やみ申し上げますとともに、先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

日本声楽発声学会理事会

木下マティアス義久氏 誌上インタビュー

2023年夏季研修会において、ドイツで実践しておられる子どもたちへの指導法を熱く語ってくださった木下マティアス義久氏。前号でその概要をご紹介します、また講演詳細は近く発刊予定の学会誌『声楽発声研究 No.14』に掲載予定です。

広報部では、帰国された木下氏に対していくつか新たな質問をさせていただきました。今号では「誌上インタビュー」という形にまとめ、ご紹介いたします。

～ ～ ～ ～ ～

——ドイツの教育制度は、日本とはかなり異なるようです。午後の時間をそれぞれの興味・関心に合わせた分野の勉強に使えるのは非常にうらやましく感じます。木下先生が指導していらっしゃるヴォルフラーツハウゼン音楽学校のサイト (<https://musikschule.wolfratshausen.de/>) を拝見すると、大変恵まれた環境のようですが、ドイツにはどの市にもこうした市営の音楽学校があるのでしょうか。また、お互いに交流があるのでしょうか。

木下：ドイツ国内、またバイエルン州内においても、地方自治体が運営する音楽学校がたくさんあります。私立の音楽学校、非営利団体として運営されている音楽学校も多くあります。ヴォルフラーツハウゼンにある私たちの音楽学校は、協会として設立され、数年後に市立の音楽学校となりました。こうしたことから、すべての音楽学校が同じではなく、組織や資金面で異なっています。

ドイツには“Verband der Musikschulen”（音楽学校協会）があり、バイエルン州でも音楽学校は“Verband Bayerischer Sing-und Musikschulen”（バイエルン歌・音楽学校協会）を組織しています。こうした協会は、音楽学校同士が集まりお互いを知るためのイベントを数多く開催しています。異なる音楽学校で同時に働く教師も多くいます。しかし、原則として音楽学校はそれぞれ独自性、異なるプログラムを持っています。

——多くの選択肢があり、また独自性ととも横のつながりがあるのは、情報交換という意味でも素晴らしいことだと感じます。さて、先日の講演では、新たに合唱団に加わった子どもたちへの、身近な動物の鳴きまねなどを用いた導入のお話を興味深く聞かせていただきました。その後、成長して変声期を迎えた子どもたちへは、どのような練習や配慮がなされているのでしょうか。

木下：ヴォルフラーツハウゼン音楽学校には、声変わりが始まった少年たちのための特別なグループがあります。そこで彼らは、それぞれの成長段階に応じた指導を受けるのです。男女混合で歌う少年合唱団の指導者は、彼らを見守り指導し、少年たちがいつ少年合唱団に加われるかを判断します。さらに、若者の男声の場合は、まず合唱団で歌い、同時に変調をきたした人のグループでも歌うこともしばしばあります。そうすることで、若手男性の声の成長を良い方向へ導くことができるのです。

このシステムの目的は、第一に声のコントロール、第二にそれによって促され、保たれる社会的な連帯感です。

——変声期を迎えた子どもたち、青年たちが排除されないよう、きめ細やかなシステムが用意されているのですね。では、このように音楽を心から楽しんだ子どもたちは、それを「誰かに伝えていきたい」と考えるようになるのではないかと思います。音楽学校から、演奏家や教育者など音楽の専門家へと進む子どもたちもいるのでしょうか。そうした「進路」についての相談にも、木下先生が乗っていらっしゃるのでしょうか。

木下：多くの子どもたち、若者たちが「自分の声」に出会い、それによって自分自身の本質的な部分を発見するのは、実に素晴らしいことです。さらに、合唱団で共に声を溶け合わせてひとつの響きになっていくことに、彼らが喜びを感じているのを観察するのも素敵なことです。

このことは、私の教育法の本質を明らかにしています。

1. 正しいか間違っているによらず、自分自身の声を発見することで「個」をしっかりと確立すること。
2. 響きの空間に身を置き、共同体を経験すること。つまり、ここでは音響上の共鳴と社会的共鳴を同時に体験しているのです。

こうした喜びを他の人と分かち合いたい、あるいは職業にしたいという希望は、繰り返し生まれ、私はその都度、音楽大学やほかの歌の仲間とともに生徒にアドバイスしています。

——豊かな音楽経験が次世代に伝えられていくのは、音楽界だけでなく社会全体にとっても有益かつ重要なことだと思います。さて、最後の質問です。木下先生は1998年に第51回全日本合唱コンクール中学校・高等学校部門の審査員として来日されていますね。その後も、日本の児童合唱団との交流演奏をされていますが、日本の合唱についての印象、ご感想などをお聞かせいただけますか。

木下：私の印象では、日本の子どもや若者は合唱団でとても真剣に、そして熱心に歌っていると感じています。合唱コンクールも、日本では大きな役割を果たしています。

日本とドイツの合唱事情には、確かにさまざまな違いがありますが、共通していることもあるように思います。それは、「うまくなりたい」「もっとうまくなりたい」「勝ちたい」と願う一方で、みんなで歌うこと、芸術、そして美を通して生まれる喜びへの期待も織り交ざっているということです。

不安や期待と喜びが拮抗した、いわば緊張状態は、日本とドイツに等しく存在するように思われます。そして、すべての合唱団員とその指導者・責任者は、その中で自分たちにとっての正しい道を見出す努力をしているのです。

——日本においても、子どもたちが音楽を、そして「声」を通じて自分を発見し社会とつながりを持っていくことを、心から楽しめるような環境を作っていく必要があると感じました。お忙しい中、ていねいにお答えいただきありがとうございます。今後のご活躍をお祈りいたしております。

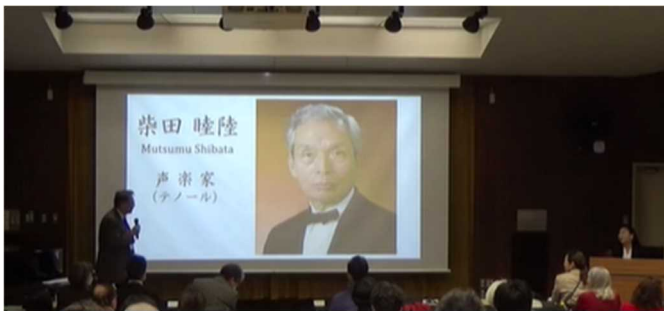
(この記事は、メールによる質問とご回答をもとに広報部にて再構成したものです。メールの仲介、独訳・和訳にご協力いただいた佐々木正利会長に、広報部一同より感謝申し上げます)

◆「第113回例会」盛況のうちに終了

真冬並みの寒さに加え雨模様となった2023年11月26日(日)、東京藝術大学音楽学部で「第113回例会」が開催されました。

【A 研究発表】

1) この日最初の発表は、豊田喜代美氏による「柴田睦陸と声楽発声」。柴田睦陸氏(1913-1988)と直接的な交流があった佐々木正利座長の思い出のエピソードから引き継いで、演奏家であると同時に教育および声楽家研修の場、特に本学会の創設に功績を遺された柴田氏の貴重な音源と著作の紹介を中心に、発表が進められました。バロックからドイツ、イタリア、邦人作曲家のオペラに至るまで非常に多岐にわたる演奏曲目に加え、興味深いのは「ラ・クンパルシータ」に関するお話です。ティト・スキエパ(1889-1965 イタリア)がこの曲の終盤で、母音 Ah のまま中声区と頭声区を往復する歌唱を聴いて「現代発声の糸口がここにある」と感じ、これが柴田氏の大きな転機になったというのです。そして、1955年NHK紅白歌合戦では、この「ラ・クンパルシータ」を披露されています。



執筆準備は1942~1946年の応召中にされたという音楽之友社発行「音楽芸術」掲載の『発声論』(4回)には、「発声はスポーツである」「芸術に理屈はいらないが、問答無用の基礎があつての上の話である」「我が国における発声理論の混乱は、一つには美学的表現と音声学的表現との無秩序な混同に原因していると思われる」などの言葉とともに、「声区」「呼吸」「デッキング」「母音」などが、

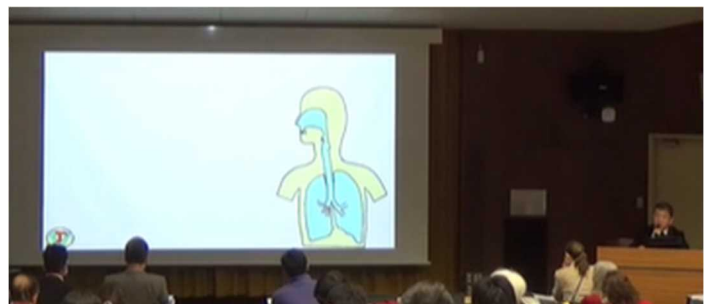
実践に基づき記されています。単行本としては発行されなかったようで、国会図書館などで閲覧するしかないのが残念でなりません。

たくさんの音源を準備していただきましたが、時間の制約によりすべてを聴くことはできませんでした。今後予定されている、柴田氏から直接指導を受けられた声楽家へのアンケートを加えての論文発表が待たれます。

2) 続いて、斉田晴仁氏による「体壁振動からの声区の考え方について」。発表に先立ち、二期会研究生の頃に柴田睦陸氏との出会いがあったとのお話があり、この日の2件の発表に不思議なご縁を感じずにはられません。

声楽発声を科学的に考える方法と必要性についての説明、つまり「科学的に声楽発声を研究するには、発声のメカニズムの中で何を行っているのかを常に意識することが重要である」という、とたく忘れられがちな指摘がありました。科学的なメカニズムとは、呼吸調節→呼吸が送られる、喉頭調節→声帯振動が起きる、声道形態の調節→共鳴・音響特性に変化が起きる、その結果声が発せられる、これらはすべて脳中枢からの指令による、というものであり、何をどう変更してどのような結果がもたらされたか、を解明する必要があるのです。私たちが聴いている「声」は「体の中に起こった変化の結果、すなわち影である」という言葉は非常に説得力のあるものです。

声区概念は、科学的根拠がないまま言葉だけが独り歩きし、研究も進んできませんでし



た。昨年発表された「声帯振動様式による分類は、ボーカルフライ、地声、裏声、ホイッスルボイスの4つである」という結論に続き、今回は『「胸声区」「頭声区」という概念は、声帯振動様式によるものではなく、声道形態の変化による体壁振動の部位によるのではないか』との仮説のもと、発表が行われました。音源を交えて、声道長の変化によって声の印象～暗い、厚みがある、明るい、淡いなど～が大きく変わること、声楽の極意は、音源特性と声道特性をいかにして別々にコントロールするかであることなどが語られ、声を科学的に理解することの重要性を感じた25分はあっという間に過ぎていきました。声門閉鎖に関する発表も予定されているとのことでした。

3) 最後の発表は、梅村憲子、森幹男両氏による「日本語歌唱時における母音の明瞭性について」。

まず、梅村氏より「勤務先における教育学部の現状」—音楽教師をめざす学生の入学試験に音楽実技が課されない、つまり声楽の経験がまったくないまま入学する子もいる、1年生後期から始まる声楽基礎Iでは90分で6人の学生を指導しなければならず、3年生で声楽専攻を決めた学生はようやく個人レッスンの時間を確保し、卒業時には歌曲やアリアを何とか歌える状態になっている—などが語られました。しかしながら、卒業後、教員の道に進む学生にとって必要なのは、日本語の歌の歌唱指導です。小学校から高校に至るまで、教科書に載っているのはほぼ日本語の曲であり、これらを範唱するためには「明瞭な日本語による歌唱」が欠かせない、というのがこの研究のきっかけとなったそうです。森氏からは、工学と音楽に関心を持ったきっかけなどユーモアたっぷりの楽しい自己紹介、骨導音に関する研究、口笛の研究のお話など、会場全体はしばしば笑いに包まれました。口笛の発音原理に発声との共通点が見られることから、声道模型による研究につながったとのことでした。



母音の明瞭性が「基本周波数が高くなると不明瞭になり、また視覚情報として口元の映像を与えると明瞭性が向上する場合がある」ことは、誰もが経験していることでしょう。これに加え、現在研究中のテーマとして「MRI撮影などによる声道形状の可視化」「歌唱時のEGG信号の収録と声門閉鎖時間率」「歌声フォルマントと母音の明瞭性を示すアプリの開発」「機械学習によるベルカント唱法の判定と評価」があげられ、その中で発声時のシンガーズフォルマント、母音のフォルマントがリアルタイムで確認できるソフトの実演が行われました。このソフトがアプリとして実用化されれば、自分の声を客観的に判断できる材料のひとつになることでしょう。発表後には、このソフトに興味津々の来場者が開発に携わった学生のもとに集まっていました。

70年の時を経て今なお学ぶところの多い柴田氏の著書、最新の機器を用いた研究、異なる分野との共同研究から生まれる新たな視点、と午前中の研究発表は、それぞれに充実した時間となりました。

【B 特別講演】

午後は、京都からお招きした廣芝新也氏の特別講演「声を治すことは心を治すこと—音声外科と美しい医療」です。

具合が悪いから病院に行くのではなく「よりよい人生のための医療」という考え方は耳に新しく、「声の障害」の概念を大きく変えるものでした。自分の感情や考えを思い通りに表出できなくなったら…自分の内面と実際に出す声に大きな違和感があったら…そこには当事者にしかわからない苦しみがあることでしょう。美しくブランディングされた医院は、それだけで相談時の緊張を和らげ、安心・信頼感を得られる環境となる、と感じ



ました。

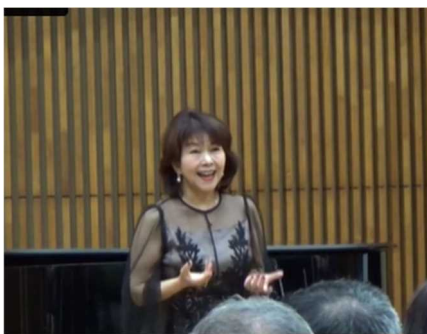
この講演のテーマとなっている、声帯に直接触れない手術法「甲状軟骨形成術」を体系化された廣芝氏の恩師、故一色信彦氏は、甲状腺がんを患い声帯麻痺となった韓国人歌手ペー・チェ Chol さんの執刀医として記憶にある医師です。実際の手術（手術中に実際に声を出し、調節する）や患者さんのお話の映像を見ながらの講演は、声に関する辛さが想像するよりもずっと幅広いこと、淡々と会話をしながら行われる手術でみるみる声に変化が生まれることなど、驚きの連続です。声が詰まる、かすれる、声変わりがうまくいかない、トランスジェンダー、他の手術の影響で声に張りが無いなど、原因がはっきりしない場合や、トレーニングでは改善しない場合にも、甲状軟骨や輪状軟骨の枠組みを変形させることで声が変わる、それは、当事者の人生をも明るい方向に大きく変える、ということにはほかなりません。

「声」で音楽を伝えて人々を幸せにすること、人々に音楽を伝える声を持つ「歌手」を育てること、声で苦しむ人に救いの手を差し伸べること、それぞれの立場で「喉頭」と深く付き合っていかなければならないと感じた講演でした。

【C 現役声楽家の演奏とお話】

この日の最後は、第1ホールに会場を移し、佐橋美起氏による演奏とお話です。

数々のオペラアリアに加えミュージカルの分野でもご活躍の佐橋氏。現在は武蔵野音楽大学声楽教授として後進の指導にもあたっておられます。



L.バーンスタインの《West Side Story》から“*I Feel Pretty*”のキュートな歌声に始まり、全曲英語によるプログラムが解説を交えて歌われました。発声のために学生に海外のさまざまな民謡を課題として与えている、というお話に続いて歌われたのは B.ブリテンの民謡集から4曲。《West Side Story》の作詞も手掛けた S.ソンドハイム作曲の《A Little Night Music》の“*The Glamorous Life*”は表情豊かに、ケネディ・センターのこけら落としのために書かれた L.バーンスタインの作品《Mass》から“*Simple Song*”は厳かな中にもジャズ

の要素を含み、同じくバーンスタイン作曲《*I Hate Music!*》全5曲は日本語訳詞の朗読をはさみながら芝居つけたっぷりに、歌声が客席を魅了します。プログラム最後はバーンスタイン作曲《*Trouble in Tahiti*》からの2曲。客席は、倦怠期の夫婦が題材となったこのライト・オペラの筋書きにクスっとしながらも、歌われた“*There is a Garden*”“*What a Movie!*”の世界に引き込まれていきました。

「現役声楽家」によるお話ということで、演奏後には声楽演奏に関するかなり具体的な質問があり、ベルティングヴォイスやミュージカルにおけるマイクの使用について語られました。また、バーンスタイン作品を演奏する場合には「楽譜に忠実であること」が必須である、それに比べてソンドハイムの演奏には演奏者の自由が認められている、という興味深いお話もありました。

盛りだくさんの一日を終えた頃には雨も上がり、参加者の皆さんはそれぞれの収穫を胸に帰路につかれたことと思います。

なお、この第113回例会については、『声楽発声研究 No.14』に詳細報告が掲載されます。

(広報部)



///理事会動静///

現在理事会で検討が進められている案件について、進捗状況をお知らせするコーナーです。会員の皆さまと理事会をつなぎ、ともに学会を発展させていく一助となれば幸いです。

【学会理念、および倫理綱領作成検討委員会】

非常に長い名前の委員会です。理事会の改選前、つまり一期前の理事会から、この学会の目的、存在意義についてのディスカッションがありました。

コロナ渦、それに伴う音楽業界の危機、また社会的にも、ビジネス、安全保障、金融などあらゆる分野で激動の時期が続く中、さまざまな組織がクリティカルシンキング（批判的思考）を率先して取り入れ、自己革新を迫られています。今回の理事会改選でも更に若返った理事会が、この学会の未来のため、学会員のベネフィットを担保するために、学会の理念、学会活動の根幹にあるべき倫理について検討する必要性が強まったのは、ごく自然な流れと思われます。

ひとくちに「声楽発声」と言っても網羅するフィールドや範囲はどこまでなのか、また研究を学会の使命の中心として考えることは自明としても、教育や演奏の現場との関係をどこまで考えていくのか、学会としての社会貢献をどのような形で行っていくのか、などさまざまなポイントでの検討が必要となっています。学会員の皆様とご一緒に、この大きなテーマについて考えていけたら大変嬉しく思います。まずは学会の理念などについて理事へのアンケートを実施し、その結果を踏まえて理念、倫理綱領検討の方向性を定めていきたいと考えています。(小森)

【IT 促進部】

6月の第一回理事会で「理事同士の連絡、意思疎通のツールについて整理する必要がある」という意見が出たことを受け、理事会として連絡ツール検討のグループを立ち上げることになりました。検討の結果、数あるツールの中から、とりあえず使い慣れたメールの延長線上にある「メーリングリスト」を理事会の公式連絡ツールとして活用するに至りました。

新しいメンバーによる理事会が動き始めた最初の時期だったこともあり、意思疎通のツールが定まらなくては理事会のさまざまな業務にもブレーキがかかってしまうこと、ツール検討よりも学会の会務の遂行にリソースを割くべきであることから、当面はメーリングリストをメインツールとして運用し、さらに議論を深めるための利便性を備えたツール（グループウェアなど）も、今後検討する流れになっています。そういう事情で当初は「メーリングリスト公式化プロジェクト」という名称でしたが、その後グループウェア、チャットなどの採用も併せて検討し、名称も「IT 促進部」となりました。学会の将来を見据えた継続的な議論、ブレインストーミングなどが可能となるよう、ニーズに合ったツールの採用を目指して引き続き検討を続けます。(小森)

【ホームページリニューアル】

現在のホームページは2016年に開設されましたが、スマホ対応となっていない、セキュリティ上問題がある、記事の更新を業者に依頼する必要があるなど、世の中の変化には数歩の遅れを取っていると言わざるを得ません。そこで、こうした問題を解決するとともに、ページデザインも一新し、当学会について広く知っていただけるよう、また会員相互のコミュニティの場としても活用できるよう、リニューアル計画を進めています。現在、数社に見積もり依頼をすべく準備中です。今後、費用面も含め理事会で検討のうえ、総会にて承認後、新たな契約のもと新ホームページの公開となります。会員の皆様からのご意見・ご希望もお待ちしております。(入川)

◆ 第 114 回例会、第 60 回総会のお知らせ

下記のとおり、第 114 回例会および第 60 回総会を開催します。

高橋純氏による特別講演は、「科学技術を用いて歌声を可視化し歌唱中の体内運動を観察する」という歌声の研究紹介と、声楽発声の科学的見地からの解説とのことです。また、第一線でご活躍のテノール、小原啓楼氏には、素晴らしい歌声とお話をお聞かせいただけることと思います。会員による研究発表 2 件とともに、どうぞご期待ください。

～ ～ ～ ～ ～

【日時】 2024 年 5 月 26 日（日）9:55～16:30

【会場】 東京藝術大学 大講義室 5-109 および第 6 ホール

【プログラム】

A 研究発表

10:00～10:30 歌劇《シモン・ボッカネグラ》における「朗唱調の歌」と、
19 世紀後半のイタリアにおける「演劇的な抑揚」の関連性

発表者：林 いのり 座長：小森輝彦

10:35～11:05 頭蓋骨の解剖学的観点による声楽のための発声方法の探求

～頭部 3D CT 画像を用いて～

発表者：西浦美佐子・遠藤志葉・生嶋一朗・増田貴寛 座長：三枝英人

総会

11:15～12:00

B 特別講演

13:00～15:00 声楽発声と科学

講師：高橋 純（大阪芸術大学講師）

司会：佐々木正利

C 現役声楽家の演奏とお話

15:15～16:15 小原啓楼（テノール・愛知県立芸術大学教授）

司会：小森輝彦

※例会案内チラシを同封しています。

※変更等はホームページにてお知らせいたします。

※総会は、事業報告、収支決算・予算等重要な審議を行う本学会の最高議決機関です。後日議案書をお送りしますので、ご出席または議決権行使書にて必ず賛否の意思表示をお願いいたします。

◆ 第 115 回例会・研究発表募集のお知らせ

2024 年 11 月 24 日（日）に、第 115 回例会を開催します。特別講演には東京医科大学兼任教授・新宿ボイスクリニック院長の渡嘉敷亮二氏、「現役声楽家の演奏とお話」にはソプラノの森谷真理氏をお招きする予定です。多くの皆さまのご参加をお待ちしています。

【研究発表募集】

○第 115 回例会にて研究発表をご希望の方は 5 月末日までに発表題目と氏名を明記した発表概要（1000～1200 字）を事務局までご提出ください。

○第 116 回例会（2025/5）の研究発表締切は 11 月末日です。

◆ 2024 年夏季研修会、蔵王にて開催

今年の夏季研修会は、かねてよりお知らせのとおり、蔵王町で開催します。首都圏以外での開催は、平成 21 年（2009 年）YMCA 東山荘・御殿場以来となります。

蔵王町は、宮城県南部の刈田郡、蔵王連峰裾野に位置し、遠刈田温泉がよく知られている地です。会場となる「ございんホール」は 455 席の多目的ホールで、平成 16 年（2004 年）7 月に開館、名称となっている「ございん」は地元のことばで「いらっしやい」の意味で、開館時に公募で選ばれ親しまれています。

講師には、昨年 11 月例会での研究発表が記憶に新しい森幹男氏、幅広いジャンルでご活躍の作曲家・木下牧子氏、そして音声生理学講座には東北大学教授の香取幸夫氏をお迎えします。また、会員による「歌の集い」も開かれます。

過ごしやすい気候となる 9 月半ば、蔵王で研修とともに都会では味わえない空気と景色を楽しみましょう。ぜひご予約ください。

～ ～ ～ ～ ～

【日程】

2024 年 9 月 15 日（日）～16 日（月・敬老の日）

【会場】

蔵王町ふるさと文化会館 ございんホール
（宮城県刈田郡蔵王町円田西浦 5）

【プログラム】

〔15 日〕

A 13:00～15:00 講演

「口笛原理の解明による誰でもプロ並みに口笛を吹ける最適口笛吹鳴法

～歌声との対比を用いて～」

講師：森 幹男（福井大学工学部准教授・口笛奏者）

B 15:20～17:20 現代日本の作曲家シリーズⅫ

合唱曲と歌曲のレクチャーによる作品解説

講師：木下牧子（作曲家）

〔16 日〕

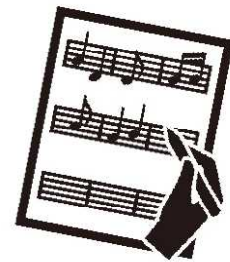
C 10:00～12:00 音声生理学講座

演題未定

講師：香取幸夫（東北大学医学部耳鼻咽喉科教授）

D 13:00～15:00 歌の集い

※出演者募集・詳細は次ページをご覧ください



【宿泊手配】

トラベル e 旅.com（仙台市、社長：佐藤芳郎）に委託します。

- ・宿泊先として「蔵王さんさ亭」「ベネシアンホテル白石蔵王」をご案内
- ・詳細は後日改めてお知らせいたします。

◆ 2024 年「歌の集い」出演者募集

「歌の集い」は、「会員の皆さまに歌唱研鑽の成果を発表していただき、それを皆で分かち合いたしう」という主旨で、2011年に第1回が開催され、2017年以降は夏季研修会に併催となりました。演奏者ご自身が何かに気づき成長の糧を見つける「場」となり、研究をさらに深めていただくことを目的としています。

2024年夏季研修会(蔵王大会)における第16回「歌の集い」出演者を下記のとおり募集いたします。会員の皆さまの積極的なお申し込みをお待ちしております。

～ ～ ～ ～ ～

【開催概要】

- 出演者：全5組(独唱、重唱、合唱)
※応募者多数の場合、理事会で選考のうえ決定
- 演奏時間：20分以内(出入り、曲間を含む)
- チケットノルマ：1組につき2,000円×10枚(20,000円)
※11枚目からは1,500円にて精算



【応募要項】

下記の①～⑦を明記して、2024年4月30日(火)までにEメールまたはファックスにてお申し込みください。

- ① 演奏者氏名・団体名(漢字およびローマ字)
- ② 住所(団体の場合は代表者住所氏名)
- ③ 電話番号(携帯電話等確実に連絡が取れる番号)・ファックス番号
- ④ メールアドレス
- ⑤ 略歴(200～300字)
- ⑥ ピアニスト名(漢字およびローマ字)と略歴(100字以内)
- ⑦ 演奏曲(原語と日本語タイトル、作曲者、作詞者、演奏時間)

○出演の可否は、5月15日(水)までにご連絡いたします。

○出演決定後、写真と歌詞(原語とご自身による対訳)を提出していただきます。

○チラシ、チケットは、6月30日(日)までに送付、チケット代納入締切りは8月30日(金)です。

【応募・問い合わせ先】

日本声楽発声学会事務局(担当：佐々木徹)
〒154-0002 東京都世田谷区下馬3-14-4
E-mail: info@jars-voice.org
Tel/Fax: 03-6804-0626

◆ 新入会員紹介

正会員としてお迎えした方のうち6名から、自己紹介のご投稿をいただきましたのでご紹介します。

(50音順・敬称略・①略歴②抱負など)

○ 伊藤麻里絵



①山形大学地域教育文化学部卒業。同大学大学院修了。現在、公立中学校音楽科教諭。
②声楽を習い始めてから現在に至るまで、常により良い発声を求めて参りました。この度、佐々木先生にお声をかけていただき、本学会に入会させて頂きました。このご縁を大切にしながら、「発声」の様々なエキスパートの皆様から多くのことを学び、吸収していきたいと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

○ 井上愛理



①山形市出身。東京音楽大学器楽専攻ピアノコース卒業。現在、山形大学大学院社会文化創造研究科2年次に在籍。辻楽器店ピアノ講師。山形センター合唱団ピアニスト。
②発声の仕組みを論理的に学び、声楽家の表現に対応できるピアノ伴奏者を目指し、勉強させていただきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

○ 佐藤知子



①昭和音楽大学音楽芸術表現学科卒業。現在昭和音楽大学大学院音楽研究科修士課程音楽芸術専攻在学中。声楽を上杉清仁氏他に師事。
②幼い頃から好きだったバロック音楽を学べるうれしさと同時に、長年にわたり悩んできた発声について学ぶ機会をいただけてとても幸せです。どうぞよろしくお願い致します。

○ 高山真琴



①武蔵野音楽大学大学院音楽研究科器楽専攻(ピアノ)修了。旧DDRドレスデンカール・マリア・フォン・ウェーバー音楽大学留学。石黒祥義、ゲルハルト・ベルゲ、ヤン・ホラークの各氏に師事。現在、國學院大學人間開発学部初等教育学科教授。
②学生の「歌うこと」へのアプローチを、フィジカル、メンタルの両面からサポートできるように、様々な角度から学ばせて戴きます。どうぞ宜しくお願い致します。

○ 新山隆健



①岩手大学教育学部卒業、同大学院教育学研究科修了。声楽を佐々木正利氏に師事。リスト・フェレンツ音楽大学コダーイ研究所にてコダーイの理念に基づく音楽教育法・合唱指導法を中心に学ぶ。

②現在、高校教諭として合唱部の指導にあたっています。よりよい表現をするために必要な発声について試行錯誤しながら高校生の声と日々向き合っています。こちらで学ばせていただいたことを学校現場で生かしていきたいと思っております。

○ 細梅睦子



①山形県立山形西高等学校卒業。合唱部に在籍し阿部昌司氏より指導を受ける。山形大学教育学部特設音楽科にてピアノ専攻し伊達華子氏に師事。小学校教員として山形県内で35年間勤務。現在、尾花沢市立福原小学校教諭として音楽の指導に当たる。山響アマデウス・コアに所属。

②自分の声を理解し長く歌い続けることや、教室で学ぶ子どもたちへの指導のために、学会に参加して、発声や体の仕組み、演奏法など、たくさんの方のことをについて学んでいきたいと思っております。どうぞよろしくお祈りいたします。

日本声楽発声学会へようこそ！
今後のご活躍をお祈りしております

当学会では、随時新入会員を募集しています。正会員1名の紹介とともに入会申込書をご提出いただき、理事会で承認後、正会員として登録されます。学会の活動に興味を持っている方が身近にいらっしゃいましたら、ぜひお声かけください。

詳細は事務局までお問い合わせください。



日本声楽発声学会事務局 QR コード→

■ お悔やみ

川上勝功先生（日本声楽発声学会顧問）

長年にわたり理事として事務局長、副会長、会長の重責を担い、学会をお支えくださいました顧問の川上勝功先生が、2024年3月19日、80歳にてご逝去されました。先生のご功績をここに称え、謹んでお悔やみ申し上げますとともに、安らかな眠りにつかれますよう、心よりお祈り申し上げます。

なお、ご葬儀は生前の先生とご家族のご意向により家族葬で執り行い、ご供花、ご供物、お香典につきましてもご辞退されるとのことです。

日本声楽発声学会理事会

● 理事会記録 (2023年10月～2024年3月)

理事会は、会長の招集により適宜開かれ、事業や刊行物の進捗状況確認、新たな提案の審議、新入会員の承認などを行っています。

今年度後期は、来年度予定されている例会・夏季研修会の準備と、各部の担当案件進捗状況報告、および学会理念に関する討議が行われました。総会(5月26日)にて、事業報告、事業計画、その他の報告と議決が行われます。

	日時	場所および出席理事	主な議題
第5回	2023年10月2日(月) 19:00～21:00	Zoom 佐々木、池田、齊藤、森井、竹田、入川、上杉、梅村、岡崎、小森、三枝、鈴木、田中、西浦、渡辺、	夏季研修会アンケートについて／第113回例会について／ホームページリニューアルについて／新入会員承認について 他
第6回	2023年11月13日(月) 19:00～21:00	Zoom 池田、齊藤、森井、竹田、入川、梅村、岡崎、三枝、鈴木、田中、西浦	第113回、第114回、第115回例会について／2024年夏季研修会について／ホームページリニューアルについて／新入会員承認について 他
第7回	2023年11月26日(日) 16:30～16:55	東京藝術大学5-109 佐々木、池田、森井、竹田、入川、梅村、三枝、佐橋、鈴木、西浦、吉田、渡辺	第113回例会の反省／第114回例会について／2024年夏季研修会について／『声楽発声研究』第14号、学会通信第51号進捗状況について／理事会内の組織について 他
第8回	2024年2月19日(月) 19:00～21:00	Zoom 佐々木、池田、齊藤、森井、竹田、入川、上杉、梅村、岡崎、小森、三枝、鈴木、田中、西浦	2024年夏季研修会について／会則改正案について／学会通信第51号掲載内容について／第114回、第115回例会について／理念・倫理綱領作成検討委員会より報告 他
第9回	2024年3月3日(月) 19:00～21:00	Zoom 佐々木、齊藤、森井、入川、梅村、岡崎、小森、三枝、佐橋、田中、西浦、渡辺	歌の集い出演者募集について／学会理念について／2024年夏季研修会について／各部署より進捗状況報告 他

(欠席理事からは、事前に委任状およびご意見を提出していただいています)

● 執行部会記録 (2023年9月～2024年3月)

執行部会では、さまざまな検討課題の優先順位など、理事会運営の方向性を決定しています。

第3回	2023年9月11日(月) 19:00～21:00	Zoom
第4回	2023年10月30日(月) 19:00～21:00	Zoom
第5回	2024年1月9日(火) 19:00～21:00	Zoom
第6回	2024年3月19日(火) 19:00～21:00	Zoom

事務局からのお知らせ

- ◎第114回例会にて、アンケート実施予定です。ご協力をお願いいたします。
- ◎研究発表、出演者募集などの詳細は、学会通信、ホームページにてご案内しています。ご確認のうえ、奮ってご応募ください。
- ◎まもなく新年度となります。
振込用紙を同封していますので、会費の納入をお忘れなくお願いいたします。
- ◎各種連絡を確実にするため、メールアドレスのご登録をお願いしています。
未登録の方は、事務局までご一報ください。
- ◎ホームページには、学会通信カラー版を掲載しています。
- ◎学会運営へのご意見、学会通信への投稿も随時受け付けています。

編集後記

編集を終え、数日後には印刷作業に取りかかろうかという時、川上前会長の訃報が入りました。あまりに突然のことで言葉ありません。学会のために時間を割き、心を配り、常に存在感のある先生でした。顧問として、これからもたくさんのご助言をいただけると信じていましたので、残念でなりません。天から、あの優しいまなざしで学会の発展を見守り続けてくださいますように。(入川)

日本声楽発声学会事務局 佐々木 徹
e-mail:info@jars-voice.org
Tel/Fax:03-6804-0626
〒154-0002 東京都世田谷区下馬 3-14-4
振替口座：00170-0-119920
日本声楽発声学会 HP
<http://www.jars-voice.org/>

日本声楽発声学会ホームページ
QRコード→



学会通信第51号

2024年(令和6年)3月発行
発行者：日本声楽発声学会
編集者：入川めぐみ 上杉清仁
齊藤 祐 森井佳子

